

日本語教師初任者(外国人児童生徒等)研修

第10回 社会参加のための日本語教育 南浦 涼介 先生(東京学芸大学)

1 インTRODakションー研修のテーマ

今日のテーマは社会参加のための日本語教育です。1回目から9回目までの実習や具体的な言語の話を通して学ばれてきたと思いますが、前回の松岡先生がされた異文化間コミュニケーションから急に抽象度が上がってきたと思います。そして、今日の「社会参加のための日本語教育」というのもとても抽象的で、何に参加するのかということがたくさんあって、すごく大きい話になっていきます。今日は、できるだけ具体的なところから話を進めていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

皆さんに、最初に聞いてみたいと思います。社会を定義するとなんですか。辞書のように説明すると「社会」はどう説明しますか。グループでちょっと話してみてもらっていいですか。社会を定義するとどういう言葉になりますか。あるいは別の言い方にすると何になりますか。

「社会」の定義は何か、グループで話し合ってみましょう。

でも、時間をかければかけるほどハードルが上がりますね。じゃあ聞いてみましょう。ぱっと思いついた「社会」という言葉を言い換えてなんと説明しますか。

そうですね。社会と言っても、地域社会もあるし、もっと大きく国際社会とか、日本社会とかありますよね。

社会というのは、定義が難しく、「社会参加の日本語教育」とはどこに向かって参加するのか、すごく幅広くて難しいですね。一つ大事だと思うのは、「場」です。その「場」は、自分が関わっていると思う「場」もあれば、自分が関わっていないと思っているが実は関わっている「場」もあるし、とても幅が広いです。「場」は家庭も社会かも知れないですし、クラス、教室も社会かも知れないし、地域も社会かも知れないですし、郡山市も社会かも知れないですし、福島県も日本もそうです。今、私たちが学んでいる国境を越えて移動するような子どもたちの場合は、そもそも「場」の空間認識は、家庭→市町村→都道府県→国→世界、と同心円状に広がっていくわけではないかもしれませんね。

ひとまず、今日はその大きなものから小さなものまでいろいろある共同体が、自分たちにどう関わっていくのかというイメージで社会を捉えましょう。いわゆる社会科教育みたいな地理、歴史、公民みたいなものも入っているけれども、それだけじゃない。今

日は社会科の勉強をするわけではありません。幅広く考えていければいいかなと思っています。

2 今日の研修で向上が期待される資質・能力

(1) 今日目標

知識1 児童生徒等に対する教育実践の前提となる知識

(3) 日本の教育制度を理解し、学校における児童生徒等の受入体制や支援の仕組みに関する知識を持っている。

技能3 社会とつながる力を育てる技能

(7) 児童生徒等を取り巻く社会の中に自身の役割を位置づけ、指導・支援の内容・方法を決定し、実施することができる。

(8) 学校や地域、家庭などでの児童生徒等の活動や、将来を想定した指導をおこなうことができる。

態度1 言語教育者としての態度

(1) キャリア支援の視点から、児童生徒等の日本語学習支援の在り方を考え、実践しようとする。

(3) 担当教師、学校関係者や保護者、地域関係者と円滑に協働し、効果的に日本語学習支援を行うおうとする。

態度3 文化多様性・社会性に対する態度

(5) 指導する立場であることや多数派であることは児童生徒等やその保護者にとって権威性を感じさせることを常に自覚し、自身のものの見方を問い直そうとする。

文化庁(2019)「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)」

今日の研修は、文化庁が出した「日本語教育人材養成・研修の在り方について」(報告)の「外国人児童生徒教育」の初任、上記の表の資質・能力の育成にあたります。皆さんの持っている自己評価シートでいうと、知識①と態度①に関わるかと思います。

自己評価シート

知識① 子どもたちが社会と関わりをもち、キャリア(進学・就職、自己実現)を形成する上で、日本語の発達がどのような役割を果たすか理解している。

態度① 子どもたちが、将来どのように社会の一員として生活するのかをイメージして、日本語学習支援の内容や方法を考えて実践しようとする。

子どもたちが社会と関わりを持ってキャリア、進学、就職、自己実現を形成する上で、日本語の発達がどのような役割を果たすか理解する——社会と関わるというときに、この子どもたちの日本語の学びがど

ういうふうに関わるのかという話です。そして態度①のところで、将来どのように社会の一員として生活するのかをイメージしながら、普段の支援の内容や方法を考えて実践することができる。このあたりが今日の中心課題になるのかと思います。

(2) 今日の流れ

今日の流れの話をしておきます。今日は全部でパート1からパート3まであります。概ね90分1単位で、お昼までに1つのパート。それから午後からの2つのパートと考えていますが、時間割的なものではなく、おおきなまとまりのパートくらいの感じで考えてください。

パート1では、外国人児童生徒の社会的成功のためにどんなことが必要なのかというのを考えます。

パート2では、外国人児童生徒が社会につながっていくために、学校というところに焦点を当ててみたいと思います。ここにいらっしゃる皆さんは必ずしも学校の先生ではないかもしれませんが、学校という場所ではどういうことができるのかということを考えていきたいと思います。

パート3では、外国人児童生徒が社会につながるために日本語の授業でどんなことができるのかということを考えていきます。

日本語教育は必ずしも、日本語の授業をするということだけではない部分がたくさんあります。今日は授業の話は最後にして、最初はちょっと大きい視点から考えてみましょう。

最終的に社会参加のための日本語教育とは何のために何をどうすることなのかということについて、皆で少しずつ練っていきましょう。午前中はパート1の部分をじっくりやっていきたいと思います。

なお、私の授業は具体的な所から入って行って、だんだん抽象的な話をしていきます。説明を最初にして皆さんでやってみましょうというものではなくて、具体から一緒に考えてやっていくというやり方をしていきますので、最初、「何やってるのかなあ」という気もするかもしれませんが、だんだん概念が作られていくと思います。

3 パート1 社会につながる力を学校でどう育てるか？

(1) 「ポケモンGO」開発者の野村達雄さんから考える

まず、この人を皆さんご存知でしょうか。第1回の市瀬先生の時に、ちょっとだけ出てきたかもしれませんが、ポケモンGOを作った製作者の方です。

(資料1:「ど田舎生まれ、ポケモンGOをつくる」野村達雄著、小学館集英社プロダクション)

この方、野村達雄さんと言います。ポケモンGOは

世界的にヒットしているのですが、これを作ったのが野村さんです。

野村さんは中国の黒竜江省出身で9歳の時に日本にいられました。今のインタビューを見ると、そんなことがまったくわからないほどですね。豊かなアイデアをお持ちで、中国から来て日本語で苦労した時間もあるけれども、大学進学して、大学院に行って、google社に入社して——今は30歳。野村さんは国際のレベルまで社会参加をしていますね。

この野村さんは、以前第1回に市瀬先生のときにご紹介されていたと思います。そのときにも言われていたように、野村さんご本人は自分が外国人児童生徒だったということ売りしているわけではありません。ただ、日本語の業界では苦しい話、課題から始まることが多いです。でも、外国人児童生徒教育は課題の話が多いですけれども、大事なことは私たちが最終的に私たちがどんな希望を見出しているのかということです。野村さんのお話は、希望のありかたの一つですね。

(2) 伝記を読み、共有し、考える——野村さんの成功の鍵は人生の中にどのように埋め込まれているのか？

では、今日、最初の課題は、なぜ野村さんは成功を収めることが出来たのか、というのを考えます。

まず、開発者の野村さんは黒竜江省から来て、日本語指導を受けてきて、そういう経歴で人生を歩んでいき、そして今ポケモンGOを開発して大成功を収めた。「なぜ？」——というところを考えてみたいと思います。なぜ、野村さんはこんなにも社会参加ができるような人生になったのか。

それを考えるために、教材として、伝記を読んで、野村さんの成功の鍵は人生の中にどのように埋め込まれているのか考えてみたいと思います。

① 野村達雄さんの子ども時代のエピソードを一人一つずつ読みましょう。

資料1の中に6つのエピソードがあります。それぞれ別々のエピソードになっています。中国の頃から大学に入るくらいまでです。まずは一人1つエピソードを読んでください。

② 自分が読んだエピソードをグループのメンバーに紹介し合ひましょう。

次に、それぞれの読んだエピソードを、グループの他のメンバーに紹介してください。

③ グループで話し合いながら、「野村さんの成功の『鍵』は何か」を付箋に書きだしましょう。

そして、野村さんの成功の鍵は子ども時代のどん

なところにあるのかというのをお互いに話してください。

野村さんはもちろん教育学の方ではありません。ですから、野村さんはただ、自分の子ども時代のことを書いているだけです。重要なのは、私たちの方が専門家として、彼の人生の中から「こういうところが大事だったんじゃないかな」ということを、推測して見つけ出していくということが大事です。では、付箋を配ります。ここが大事だと思うところを、付箋に書いていきながら、お互いに出し合ってください。あとで集約します。

(3) 野村さんの成功の鍵は何か？

では、各班で出た「野村さんの成功の『鍵』」について、これはというものを1つ出してください。

(以下、話し合いになり、その後話し合っただけのものをもとめていく)

さて、どういうものがありましたか。

(グループごとに出して行って、それにコメントしていく)

野村さんの人生を見ると、「自分の得意とすることが、利益を生み出す」ということを念頭に置いて、それがいろいろあつながついていくことがよくわかりますね。そうした発想で成り立っているものがあることを、彼は学校生活、人生の中でいろいろな形で身に付けていったのでしょう。言葉のこと、中国語にしても、利益になることが何かあるんじゃないか。あるいは、パソコンの可能性のようなことを見据えて、それを得るために逆算してアルバイトをしたこととか。また、そうしたことの前提に、自分が、日本語のできないお父さんに代わっているような手続きのことをして、手続きのような作業が得意だった——というような話もありましたね。

得意を知るとというのは、とても大事ですね。このあたりは、前の授業にも出てきたアイデンティティや自尊心のようなことにもつながってきます。得意を知るということは、自分を好きになれるということにもつながっている。それが成功への導きにもなる、のかもしれないですね。

他にもありますね。家族の中で工夫しながら生きてきたという意見がありました。このあたりはどうして成功につながったと思いますか。

ひょっとすると、工夫することと、目の前にあることで何ができるかということを考えるということが、さっきも言った想像力というものにつながるかもしれないし、個性を自分で作っていくことになるし、それを産み出す思考する力といういろんなものがここにあったのかもしれないですね。これが全てではないのですが、皆さんが、考えてくださった野村さんの成功の鍵です。

表 受講者から出た野村さん成功の「鍵」

幼少期の体験。お金はなくて貧しかったかもしれないけれど、家族に否定されることもなかった。動物とのふれあい。

家族という社会の中で工夫しながら生きていたことは大きかった。

引っ越したときに自分のアイデンティティを隠さなかった。

自分は中国語も有利になるのではないかと思い、なくさないようにした。有利になることを自分で考え、それを繰り返していた。→自分にとっての「利」を見つけてそれを大事にした。

小6から中3までアルバイトして、自分のためにお金を使う。

ゲームなど興味のあるものを突き詰めていくタイプ。

アルバイトをして、好きなプログラミングの知識を得て、独学で興味のあるものをつくる。

ゲームをつくる。創造力。

(4) 野村さんの成功は、野村さんだからできたのか？他の外国にルーツをもつ子どもでもできるのか？

さて、今日は社会参加につながる日本語教育です。ですから、野村さんの話だけで終わってしまうと、「野村さんすごいね」で終わってしまいます。でもそれでは大変もったいないと思います。

もう一つ考えていきたいのは、この成功は野村さんだからできたのかということです。他の外国にルーツをもつ子どもたちでもできるのかということを考えてみたいと思います。

野村さんは手厚い支援を受けたタイプではないのかもしれませんが、だからこそ、教育的な組織のシステムの視点で考えてみたい。どうやったら、第2、第3の野村さんを、今度は教育として、意図的計画的に生み出していくことができるのかということです。

野村さんがアルバイトで成功したからといって、「アルバイトに行けー！」と言うわけにはいかないかもしれませんね。「考えなさい！考えなさい！」と言ってもなかなか考えられないかもしれません。でも、野村さんの人生のエッセンスから私たちが学べるものもあります。

それから、これは授業だけでなんとかしていく問題でもありません。授業それ自体も大事だけれど、教育のシステムで作っていくためには、私たちは大きい組織作りというものを考えていく必要もあります。学校なら学校、それに類するボランティア団体とか、いろんなものがあると思いますが、組織全体で、どう

いった形で運営していくことが、成功を生み出すことにつながるのか。それを考えた上で、授業としてどんなことができるのかというのがあります。

野村さんだからできたことの中に埋め込まれていた、工夫する力とか、考える力とか、目の前のことに興味を持てる力、あるいは、自信を持てる力とか、想像する力とか、そうしたことを、じゃあどうやったら教育の中でできるようにするのか。具体的に学校という場でどうするのか。そして授業をどのように作るのか——ここからはそうした教育の具体を考えていきたいと思います。

ぜひ皆さんに出してもらった野村さんの鍵は、必ず繋がっていきますので、それを意識しながら午後やっていきたいと思います。野村さんを2人、3人作るには、私たちはどうしたらいいのか。それが今日の私たちの1つの大きなテーマです。では、これで午前中終わります。午後からまたよろしくお願いします。

4 パート 2 社会につながる力を生み出す学校づくりと外国人児童生徒

では午後の部を始めたいと思います。野村さんのような人を私たちが意図的に教育で育てていけるようになるためにはどういったことが必要になってくるのかということを、社会につながる日本語教育、社会参加としての日本語教育という点で考えていきたいと思います。

2つ目のパートとしては、それを学校づくりという点から考えていきたいと思います。午前中の授業でもやりましたように、できるだけ抽象論で語るんじゃなくて、具体から始めていきます。

(1) A小学校の取り組みから考える

事例として取り上げるのは、私が15年くらい関わっている小学校の取り組みから考えてみたいと思います。この学校は歴史的な経緯から、厳しい学校と言われていまして、校区でも経済的に厳しい家庭が多いと言われています。そうした地域の中に、外国につながる子どもも多くいるという状態です。外国から途中から入ってきた子どもに、昔だったらどんなことがあったかという、日本語をある程度話せる子に隣の女の子が通訳したり、中国語で話しかけたりしていると、他の男の子が、「おまえ日本語でしゃべれ。中国語でしゃべるな」と言ったりすることが多かったといいます。以前だったら周りにはシンとなってしまって、言われた子は悲しいばかり。しょっぱなからやられてしまうという構図がありました。一応謝りなさいと先生に言われて謝るけれども、当然心から謝っているわけではないから、余計にそれが悲しい——ということがあったことを当時の先生は言われています。

ところが、この10年くらいの間に、なんだか学校

が全体的に落ち着いてきた——と周りからも言われるようになってきました。最近になると、校長先生が言われるには、そういうようなことがあると、女の子が「そんなこと言っちゃだめでしょ。わからないんだからしかたないじゃん。教えてあげてたんだから」と、その子を守るような発言が出てきたそうです。最近はそのようなことが言える子がだんだんと増えてきて、そういうふうに言われると、男の子もタジタジになってしまうものも言えなくなります。今まではそういう悪いことをするのに、周りも乗っかっていくような雰囲気や、それに対して誰も言えないという雰囲気が多かったんですけど、客観的に見て正しいことを言える子どもやフォローできる子どもが増えてくるようになったそうです。

それから、この学校の隣には、県で一番の進学校の高校があります。この高校には、この地域の子どもや外国から来た子どもたちはなかなか進学することができない高嶺の花の高校でした。しかし、ここ数年、この高校に、中国から来た子どもたちがときどき入学するようになってきました。こうした、これまでにない変化が学校に起きているねと周りからも言われるようになってきました。

今日、二つ目に考えてみたいのは、なんでこんなことが起きるようになったのかということです。

グループで話し合いながら、これら4つのエピソードの中に共通している「分断された世界に変革を起こす学校の仕掛け」がどんなところにあるのか、キーワードで答えてください。

なぜ小学校は変わったのかということを事例にして、そこから、さっきの社会につながっていくような子どもを育てていくために、学校は何ができるのかということを考えてみたいと思います。そこに社会との接続を産み出すヒントというのはどういうものがあるのか。それを考えるために、4つのエピソードを読んでもらいたいと思います。

(資料2：4つのエピソード)

エピソード① 校内放送
エピソード② 卒業式
エピソード③ 教務主任
エピソード④ 竜踊り
を、それぞれを分担して読んでください。

さっきと同じように、今からテーブルに資料2を配ります。これにまず目を通してください。これは1人1冊お渡ししますので、なぜ小学校は変わったのかということを、それはそこに教育者はどういう仕掛けを作ったのかということを考えていきたいと思っています。

これら4つのエピソードの中に共通して分断された世界に変革を起こす学校の仕掛けが入っています。

分断された世界が10年間で変わったその仕掛けがどんなところにあるのか、キーワードで答えてください。

＜受講者から出たキーワード＞
相互理解、同化ではなく尊重
共生、一緒にする、当たり前
認める、隅のものを真ん中に持ってくる（周縁を中心に）
同じスタートラインに立つ
みんなで参加 特別扱いからの容認
分断しない
自信をつける

(2)「学校を変える」という点からエピソードにある共通点は何か？

さて、なぜこれが学校を変えるということにつながるかです。今キーワードがいくつか出てきましたよね。キーワードがいろいろありますけれども、結局どうつながっているんだろうか、それを考えます。全部をつなげなくてもいいです。このキーワードを使いながら、学校が変わっていくを考えていく時に、それぞれのキーワードがどうつながっているんだろうかを考えていきます。

皆さんが出したキーワードがどういうふうに関係しあっているのかということを話し合います。

キーワードを使って説明することは、概念的なことを理解するのにとても重要な方法です。よく、期末テストなどで「以下の語群の中から3つを使って説明せよ」というようなことがありますね。普段使わない言葉をうまく組み合わせながら説明する中で、抽象的な物事の話ができるようになっていくようにしています。なので、私たちもこの分野の語群——自分たちで作ったキーワードをうまく使いながら説明するというのは、重要な言語化の作業になるわけです。

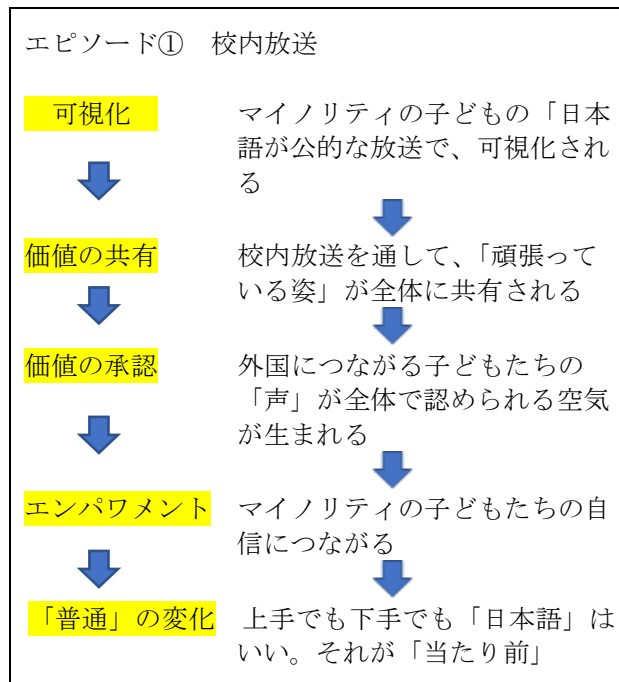
（グループでエピソードの関係性の話し合い）

(3) エピソードの整理と概念化

① 校内放送のエピソードから可視化と承認の関係を理解する

スライドで示した表を追いながら、それでは説明をしていきますね。

まず、校内放送のエピソードです。これは、来たばかりの子が校内放送で話すことで、マイノリティの子どもたちの日本語が公的な放送で可視化されるということが起こります（可視化）。



普段だったら、あまりしゃべらないとか、どちらかと言えば隠したいものです。野村さんの話にもあったように、自分の喋っている日本語が当然ネイティブみたいになれないので、自信がない、できるだけ話したくないという状態が普通だったところに、こうやって放送委員を務めることで、可視化され、皆に見えるわけですね。そして、それが何を起こすかというと、校内放送を通して頑張っている姿が全体に共有されるということが起こります（価値の共有）。

例えば、「あの子がやるの？」という状態で出てきて、驚きとともに、校長先生の話の中に、「頑張っているね」とか「すごいね」とかいう声が出てきたりするような形で、それが共有されて、その頑張っている姿を見ることによって、声を全体で認めていく空気が生まれていきます。さっき言った、「頑張っているのね」とか、「すごいね」とか、「僕だったらそういうのできないね」という話もそうだし、認められていく空気が生まれていきます（価値の承認）。

そして、そこでほめる言葉が出てきたり、先ほどの容認という言葉が出てくるように、容認される空気が生まれてくると、それが自信につながるということになります（エンパワメント）。

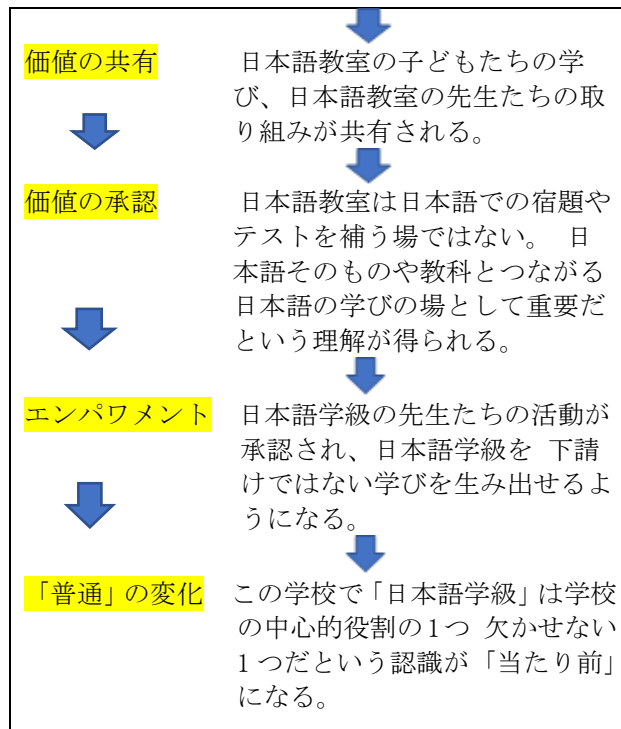
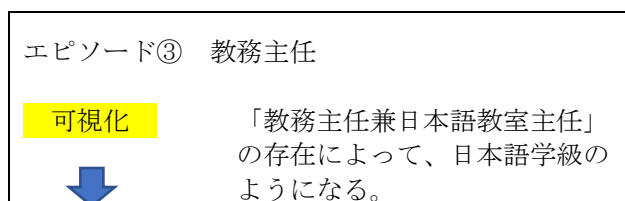
そうすると、それがどんどん当たり前になって、上手でも下手でも日本語はいいんだというふうには、「放送委員は誰が務めてもかまわないし、流暢じゃなくても放送委員はできるよね」、「日本語が上手じゃなくても、文法的に正しくなくても、別にいいじゃん、わかるし」、そういう状態が生まれてきたら、それが当たり前という話で、校長先生の話にも合ったように、今となってはそれが特別すごいことではなくて、それが普通だという状況が生まれてくるわけです（普通の変化）。

もう一回見てみましょう。マイノリティの子どもの日本語が可視化される、しかもそれは学校の中という放送委員という割とちょっとカッコいいシーンで、見せ場になるところで可視化される。そうすると、「え？あいつがやるの？」という状況が生まれる。それが共有される。その声が全体で認められる空気が生まれてくる。それが自信に繋がっていく。そうすると、それが当たり前という状態が生まれてくるということです。

キーワード的にくくると、まず最初に可視化が起こるんですね。普段どちらかと言うと隠したいという働きがあるものを、積極的に見せる。しかも見せるときは、堂々と見せ場で見せるという状態があるわけですね。放送という場面を使って、ここぞという場面で見せると、それはすごいという感じになって、その価値が共有されるということが生まれてきます。価値の共有が生まれます。そうすると、価値が承認されて、承認という言葉がまさにそうだと思いますけれども、そこでやっている、頑張っているその姿が共有され、承認が生まれます。承認という言葉でももちろんいいと思います。その子たちがやっていることの価値が、頑張っていることの価値が、もっと言うとその子が持っている本来の声とか言葉の価値がそこで認められます。「帰れや」とか「下手くそやな」という話ではなく、「カッコいいな、あいつ」という状態になっていくということです。それが結果的にエンパワメントされるということになるわけです。いわゆる認められるという感じだったり、勇気づけられると、普通が変化します。さっき話した当たり前という話もまさにそうなんですけれども、普通が変化する。その世界が元々は日本語が流暢なのがあるべき姿で、日本語が流暢じゃないのはふつうじゃないという状態だったのが、そういう価値観がそこにあったものが、そうじゃなくてこうやって見せていく中で、普通そのものが変化していくという状態が起きるわけです。「別にいいじゃん」という感じで。そうすると、物事が変わっていく。そこにある有り方が変わってくる状態が生まれるわけです。こういう可視化、価値の共有、価値の承認、エンパワメント、普通の変化というこの一連の流れは、実は、他のエピソードにも意外に共通しているのではなかったでしょうかということなんです。

② 教務主任のエピソードから可視化と承認の関係を確かめる

では、今見たことを、今度は教務主任のエピソードで見てみましょう。



このエピソードは子どもの話じゃないですね。皆さんもよくご存じだと思いますが、日本語指導であったり、日本語を支援している支援者の先生というのは、学校の教職員集団の中では、どうしても隅に、周縁に置かれがちです。中心は学級担任だったり、教科の先生だったりする中で、どちらかと言うと隅っこに追いやられがち。そこには空間的な隅っこという意味ももちろんあります。職員室の隅であったり、あるいは日本語教室自体が学校の隅にいたり、いろんな形で隅に置かれがちなんです。

そうすると、そこでは、ただ空間的に隅というだけでなく、権威が生まれてくるわけです。パワーみたいなものがでてきます。学級担任の方が権力的なものが強くて、日本語支援者の権力がどうしても下がってしまう。同じような状況が日本語指導だけでなく、もしかすると養護の先生とか、給食の先生や栄養士の先生もひょっとするとそういう側面があるかもしれません。

その中でどうしても日本語の先生も外国からきて日本語指導を受けている子どもも周辺化されがちなんです。日本語指導をする先生も周辺というところに置かれがちで分断されています。そうみると、それはどうすれば上手くいくようになるか。

例えば、今の可視化で言うとうどうなるでしょうか。実は日本語教室って、学校の中でも見えにくい場です。それが教務主任兼日本語教室主任という先生の存在があることによって、普段日本語学級で何やってるかわからないという状態が解放されます。毎日空間的に隅っこにあるがゆえにすごく見えにくい場所にあたり、そもそもそこにドアを閉めて授業をしていることによって、いいことはしているん

だろうけど、具体的に何をしているのかが見えにくい。それが教務主任の先生が入ってくれるおかげで、「今、日本語ではこういうことをしているんだよ」という話があったり、あるいは「テストやってください」となったら、「ごめん、今、日本語教育でこういうことをやるから」というような形で対話がそこに生まれます。

教務主任という人の存在がさっきの校内放送という放送委員、校内放送という道具になって、つないでくれるという状態が生まれるわけですね。そうすると、見えるという状態が起きることによって、職員の先生方の間で、日本語教室の子どもたちの学びと、日本語教室の先生たちの取り組みが共有されるということが生まれてくるわけです。「そうなんですか、日本語指導はそんなことやっているんですか。テストの代理をやってくれているわけではないんですね、そうしたことをすることもあるけれども」という価値が共有されてくる。そうするとその頑張りが、日本語教室は、日本語の宿題とかテストを補う場だけじゃなくて、日本語そのものとか、教科とつながる日本語の学びとかいろんなものをやっているところとして重要なんだねということが、いろんな先生たちに伝わり、共有されていきます。そして、「なるほど、先生たち頑張っているんですね」という承認がそこに起きるわけです。

そうすると、日本語支援者のエンパワメントが生まれてきます。先生たちの活動が承認されていく中で、日本語学級がいわゆる下請けではない、ちゃんと学びを産み出している場所なんだということで、自信を持てるようになっていく。そうすると、もっとやってみようとか、こんな試みをしてみようっていう状態を、先生たちが持ちかけられるようになっていくというふうな状態が起きていくと、さっきの隅っこから中心にという話のように、周縁から中心へとあるように、この学校で日本語学級っていうのは、学校の中心的役割の一つで、欠かせないものだよねという認識が当たり前になるという状況が生まれてくる。別に先生たちが意図してこういう理論を作っているわけではないんですが、意外にやっていることには共通法則があって、可視化され、共有され、承認され、エンパワメントされ、普通そのものが変わるという状態があるということです。

③ 他のエピソードをグループで概念化する

それは竜踊りであっても、卒業式であっても、似たような側面がありそうです。では、竜踊りだとかだよねとか、卒業式だとかだよねとかの話を共有してもらえますか。

(グループで話し合う)

卒業式のシチュエーションはどうだったかという
と、6年生は20人くらいしかいません。昔は卒業式

に5年生しか参加しなかったんですが、それを1年生も含めて全員でやろうとなって、そのかわりに短くやろうということになりました。これまで縦割りでいろんなことをしてきたから、在校生が体育館の遠い位置から、体育館に横並びになっている20人のお世話になった先輩である6年生一人一人に対してメッセージを出していくんですね。

6年生の中には、日本に来たばかりで、日本語が全然わからないからそのメッセージが何を言われているかわからないという状況も当然あるので、即興で、5年生の中国語の分かる子に通訳をお願いして、中国語で同じメッセージをその子に投げてくれることで、意味が掴めるという状況になるんです。それは別にこういうことをしようと思ってやってるわけじゃないけれども、普段見えにくい中国語っていうものが、卒業式のステージに向けて何か話すなんていう見せ場中の見せ場ですよ、その見せ場をしっかり選んで、その見せ場の中で、中国語で同時通訳をして、しかもほぼ即興で何かを言うという状況が見えることによって、「なんか中国語が格好いい」という共有が生まれてくるわけです。

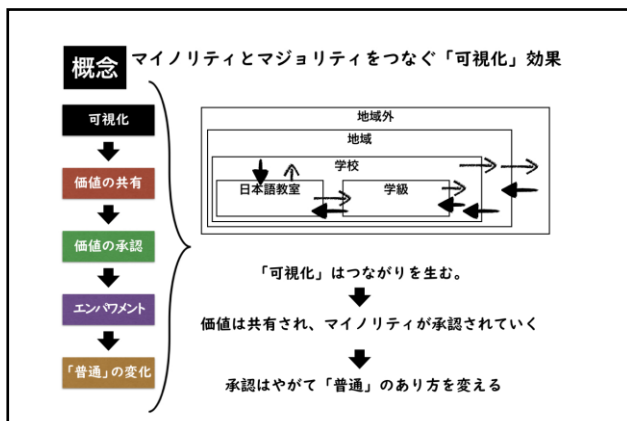
言語自体がヒエラルキーがあるので、日本で外国語で日本語より価値があるのは今のところ英語だけです。そうすると、英語以外の言語がかっこいいという状態がなかなか見せにくい。それは子どもたちも分かるので、英語であってもなかなか英語を出さないという状態がある中で、普段隠したいと思っている言葉を、見せ場で公的に見せるという状態を作ることによって、しかも先生のお墨付きで見せられることによって、格好良さの共有が生まれてくるわけですね。価値って言うのは別の言い方にとすると格好良さです。そうすると格好良さが共有され、格好良さを認められるという状態が生まれてくることによってエンパワメントされます。

この場合はエンパワメントされるのがステージの上に立っている卒業生なのか、通訳をしたその子なのかというのは、ちょっとわからない部分はあるんですが、そういうことを同じ空間の体育館の中でやるっていうことが、いろんな子たちに対して、「中国語、格好いい」というエンパワメントが生まれてくるというわけです。しかもそこには保護者もいて、保護者の中にも中国のルーツを持った保護者がいるという中で、地域の中でも中国語が認められない世界の中で、「中国語、格好いいね」という状態が地域ぐるみで認められていくという状態が生まれていくことによって、普通中国語は格好良くないという状態ではなくて、それもあっていいよねという、普通そのものが変化していくということが生まれてくる。これは竜踊りもそうだと思います。

(4) マイノリティとマジョリティをつなぐ「可視化」効果

なぜこれが社会参加としての日本語教育なのか。これらは決して先生方がここまで緻密に考えて作っていたわけではもちろんなくて、感覚の中で、こういうことをしたらそういうことが生まれるんじゃないかっていうことを考えながらやっているわけです。特にこの中でキーマンは校長先生です。巧みにこうした発想を持って行く中でマイノリティとマジョリティをつないでいく効果が、可視化にはあるようです。こうやって「見せる」ということは、いろんなきっかけを生み出すということがあるんですよということです。普段だったら、マイノリティの状態というのは、往々にして、どれだけがんばっていても「見せない」という状態を生み出しがちです。けれども、そこをちょっと発想を切り替えて、見せ場を作って見せていくという状態を作っていくといろんな効果が生まれるということです。

例えばこんな感じです。



社会空間というのは、いちばん最初に話したように、社会というのはいろんな側面があります。小さな社会もあれば、大きな社会もあります。今回の学校というところと言うと、日本語教室の外側に学級という社会があって、そして地域というのがあって、地域外があって、大きくなると国というものもあるかもしれませんが、こうやって見せていくという状態があると、普段だったらそこに壁があって、物理的にも精神的にもいろんな壁があって、見せない見えないという状況があるところを、可視化していきます。ただし、それはシースルーにして透明化するというのではなくて、いい所だけ見せるという状態です。

見せ場で「感謝了（ありがとう）」と叫んでいる子どもはいつもいいことをしているわけではありませんよね。もちろん、褒められないこともいっぱいしているんだけど、それをあけすけに見せるっていうことじゃなくて、頑張っているところを、先生とか支援者が戦略的に見せるという状態をうまく作っていく。それは意図的だろうと思われるかもしれませんが、意外に私たちの世界ってそういうものです。SNSだって、facebookとかまさにそうですけれども、自分の良くないところを見せるということはあまりなくて、いいところを見せていくことで、周りから承認

を得られたりすることに、楽しさを感じたり、つながりを感じたりするわけです。

そういう意味で言うと、普段分断されがちな何かを、あえて戦略的に見せていくということを使っていくと、そこにつながりが生まれるんです。社会的なつながりがそこに生まれて行って、普段だったら分断されがちなところ、社会のつながりとか、その人と外側にある、最初にやった私の場として関わっていなかった場とか、関係が無いように見えた場が、見せるということによって、つながっていきます。そのつながりが承認・容認を生み出すという状態が、生まれていく。そしてその価値が共有されて、そしてマイノリティが承認・容認されていくという状態が、生まれていくということです。そうすると、その承認は、やがて普通っていうものの在り方をも変えていくんですよということです。

そうすると、マイノリティとマジョリティという世界がそこに合って、マイノリティの言葉や文化のマイノリティに対して、私たちが何か支えを作っていくという究極の側面は、こういうことをしていく中で、彼らが社会環境を作っていく、社会との関係性を作っていくことが大事になってきます。それはこういう形で見せていく、見えるようにしていく、その子のいいところを外に見せていくという行為の中で、つながりが作られていくという側面があるということです。もちろんこれは、一足飛びに授業に使えますよということではまったくないんですが、地域のボランティア教室でもそうですが、例えば七夕飾りとかを作って、願い事を書いて、それを教室の中で飾って終わるだけじゃなくて、支援者の先生が戦略的に七夕の日が終わるまで、公民館の入口にかけておくだけでも、それが地域の人にとって、「ああ、外国から来た人はこんな願い事を書いてるんだ」というのが見えていって、そこに承認とか価値を生み出すということが、実はあるかもしれない。私たちは実はそういうことをやっているんですね。

(5)「分断」から「つながり」へ、「排除」から「承認」へ、「自己否定」から「自尊」へ、そのためには？

① 社会正義の視点1 再分配

こうしたことを、ある程度意図的にできるようになっていくと、分断からつながりへ、排除から承認へ、あるいは自己否定から自尊へというものを生み出していくことができるようになります。

どちらかと言うと、マイノリティの人がマイノリティって見なされてしまう場所で分断されている、排除されている、それから自己否定が生まれていく、という状態をどう変えていくときの視点とはどのようなものでしょうか。

こうした視点の議論を、「社会正義」といいます。社会正義の視点では、まず大事なのが「再分配」だと言われています。再分配というのは、マジョリティの

みが持っている権利や機会をマイノリティにも与えていくことです。

これは当たり前のことですね。例えば教育だってそうですし、日本語指導そのものだってもちろん再分配、普段だったら触れられないものをあえてボランティア教室や日本語支援の教室で作っていくことで、それを与えていく。その資源をマイノリティの彼も持てるように機会を与えていくということが大事になります。

② 社会正義の視点2 承認

実は私たちの仕事は常に再分配の領域ですよ。教育の機会の再分配、日本語の再分配、マジョリティしかもっていない日本語を外国から来た人たちにも与えていくという形で分けて機会を作っていく。ただ、大事なんだけれども、難しいのは、機会を与えていくことだけでは、なかなか共生に繋がっていかないということがあるんです。ただ機会を与えているだけでは、権威関係というのが変わっていくことが無いし、日本語を学んでいても、それがマイノリティじゃなくなっていくという状態をうみだしていくとは限らない。

じゃあさっきのA小学校の取り組みから見えることって何かというと、一つは「承認」を生み出す社会を作っていくということです。さっきの可視化というのは、マジョリティとマイノリティとの間に承認関係をつくるということです。認め合える関係をちゃんと作っていかないと、機会が与えられているだけでは、認め合いまではいかない。承認するということで、マイノリティが本来持っているマジョリティには見えない価値、それは外国から来た子どもたちだけじゃなくて、日本語支援者と学級担任の関係もそうなのかもしれませんが、学級担任の世界から見ると日本語支援者の世界の何が重要なのか、いまいち見えにくいけれど、そういう仕事の中で可視化を通して、見えなかった価値というのがその場で認められていく状態を作っていくと、そこにはお互いの共生の関係であったり、つながりの関係というのが認められていくし、社会の外側に出ていきやすい。

それは日本語支援者も同じで、そういう承認関係がそこにあれば、もっとこういうのやりませんかという話を職員室で提案できたりするかもしれないし、行政とそういう関係が生まれていると、行政に働きかけるということもできる状態で、外に働きかける勇気が生まれてくるという状態が生まれてくるわけです。

③ 社会正義の視点3 代表の再定義

A小学校のもう一つ参考になるところは、承認だけではなくて、さらにもう一つ先に進めているところです。「代表を再定義する」という言い方が最近されています。承認するだけでは、認める関係と認めら

れるという関係は変わらないわけです。つまりマジョリティがマイノリティを認め、マイノリティは認められる側で、「すごいね」といつも言われる側というのは変わらない。

例えば、これは日本語の取り出し授業で国語の授業をやっている、国語の教室に戻ったときに、フィリピンから来た子がハイッて手を挙げて発表ができる。それは日本語指導のおかげなんだし、それによって教室の中で、「あの子、国語の時間で発表できるようになったんだ！すごいね！」ということ自体は承認です。ただ、そこでは認める認められるの関係性が変わる、逆にフィリピンから来た子が認める側に立つということは、なかなかない。

A小学校の一つの感覚は、「これが普通だよ」ということ自体が変わっていくこと、これを結果的に作ってしまっているわけです。今の国語の授業というと、ごんぎつねという日本の昔話とか、山月記を学ぶのを、例えばフィリピンから来た子が学ぶと確かに凄いいねとなるんだけど、マジョリティの側からすると、例えばフィリピンの民話とかをやったフィリピンの子がすごいねと言われることはなかなかないですね。その在り方、何がそこでメジャーなものなのか価値そのものも変えていくということができていくと、本当の意味での共生が生まれていくのかなと思います。

そういう意味ではいかに認め合って、いかに承認し、いかにその世界の普通を変えられるかということが、社会とのつながりを産み出すし、繋がれる私というものを生み出すし、つながれる勇気を持てる私を生み出すし、それが結果的に共生というものを生んでいくんじゃないかと思います。

ここでいう共生というのは、間にあるバリアが本当の意味でなくなるという状態です。それを生み出すためには、再分配、承認、代表の組み換えというこの3つの話がうまく回っていくことで、一つ生まれるのかなと思います。そのときに、A小学校から学べるのは、そういう組織や学校を作るためには、勇気をもってちょっとずつ見せていくという状態、七夕飾りを外に出して見えるようにするという小さな行為が、意外にその世界のそういうものを作り上げていって、その蓄積ができればできるほど、その場所が変わっていき、社会とつながりやすい場が生まれていき、分断が起きにくい場が生まれてくるのかなと思います。そういう意味では、社会との繋がりを生むための学校作りというのは、いろんなところで活かせるかと思います。これでパート2は終わります。

残りの時間で考えたいのは、こういう発想は大きな学校づくりなんかではわかるけども、日常の日本語指導みたいな場だと、どういうことができるんだろうということを、社会参加を生み出す日本語の授業というのは、どういうものが考えられるのかということ、考えてみたいと思います。

5 パート 3 外国人児童生徒が社会につながるために 日本語の授業で何ができるか？

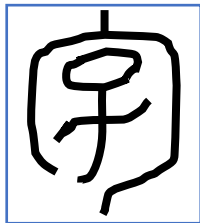
ちょっと抽象的なことが多かったので、頭も疲れていると思いますので、頭の疲労を取るクイズをしてみたいと思います。面白いところから始めたいと思います。

パート3は何の話をするかというと、野村さんの話から皆さんに出していただいた社会参加の成功を収めていくために大事な力、創造力とか、個性とか、自尊心とか、あるいは考える力とか、じっくりやってみる力とか、個性を出し切る力とか、趣味に徹するとか、好きな物を突き詰められる力というもの、どうやったら作っていけるのかというところとつながっていく話かなと思います。でも、いきなりそれをやるとしんどいので、クイズからはじめましょう。

(1) 実際の指導場面を想定して

① 漢字からの指導を考える

これは何の漢字でしょうか。どうぞグループで話してみてください。



これは抱むです。真ん中のもとの字は胎児で、赤ちゃんを包む妊婦さんの絵なんです。抱むというのはもともとそういう意味なんですね。これはなにかというと、日本語指導の時間にこういうことをやると楽しいですよという話でもあります。

② 未来のルールを考える

20年後車が空を飛べるようになったらどんな事故が起きると思いますかというのと、安全に運転するためにはどんなルールが必要ですかということをグループで話し合ひましょう。

僕が行っているボランティア教室で、マレーシアから来た男の子が勉強に飽きて、「車は 2030 年に空を飛びますよね」みたいなことを言っていたことがありました。

それをうまくいかせないかなと思って、他の先生が飛ぶよ、飛ばないよと言っていたので、飛ぶかもしれないけど、飛んだ時に事故が起きるよねという話があって、その時にどんな事故が起ころうか、事故が起きないようにするにはどんなルールがあったら安全に運転することができるかという話をちょっとしました。そしたら隣で別の勉強をしていた男の子ものってきて、「なに、何」と言って入ってきました。

それはそれで面白かったんですが、せっかくなので皆さんも考えてみましょうか。20年後車が空を飛べるようになったらどんな事故が起きると思いますかというのと、安全に運転するためにはどんなルールが必要ですか、というのを今の交通ルールを思い浮かべながらちょっと話をしてみてください。どんなルールが必要ですか。

そもそも、どんな事故が起ころうですか。まず道路を作るべきか作らないべきかという議論ができますよね。よく考えたら、私たちが車を持った時も車道はなかったのかもしれない。車は自由自在に走れたのかもしれない、車道を作るべきかというのも、一つ考えるべき要素ですよね。飛行機が通るかもしれない。踏切みたいな標識がいるかもしれない。高度で分ける。車のゾーンと飛行機のゾーンを作る。なるほど。そんな話をして、盛り上がりました。

③ 推測しながら対話する

もう一つは水平思考ゲームというものでシチュエーションゲームとも呼ばれるものです。最初にルールを説明します。今から私が、ここにお題を出します。皆さんはそのお題を考えるに当たって、謎が出てきます。その謎を解くために私に何を聞いてもいいです。ただし、私は「はい」か「いいえ」でしか答えません。だから、どうしてですかという質問には答えられません。「はい」か「いいえ」で答えられる文章で質問してください。私は「はい」「いいえ」「関係ない」の3択で答えます。

山下さんはマンションの10階に住んでいます。朝、外に行く時に山下さんは、10階から1階に降ります。ところが、夕方外から戻った時は、エレベーターで1階から8階まで行き、そこから階段を使って10階の家に戻ります。どうしてそんなことをするのでしょうか？

これは外国から来た子どもでもできるものなので、皆さんも真剣に考えてみてください。ちなみに昔やった時は小学校6年生の子は15分でできて、私は2時間かかりました。今日はすぐ終わりたいので、真剣に個人で質問してください。

(ひとしきり質問がとびかう)

受講者：山下さんは10階のボタンを押せる身長がありますか？

講師：いいえ。(あっ！という声)

受講者：山下さんは子どもです。

講師：正解です。

私はこれを解くのに2時間かかったんです(笑)。小学生は自分に置き換えて考えるのでできるのかもしれませんが、意外に日本語活動でもできるものです。もう一つ、学生がつくったものです。

(学生が作った問題)

さとみさんは、雷が嫌いです。でも、ある日雷の音を聞いて、さとみさんはホッとした顔をしていました。なぜ？

これは問題のつくりかたが結構難しく、大風が吹けば桶屋が儲かるみたいな感じで学生も結構練ったんです。本当はもっとギャップがあって、光と音の関係と学生は言っていて、雷の音を聞いたんだけど、光を見てだいたい経ってから音を聞いたから、まだまだ大丈夫だって思ったというシチュエーションだそうです。いずれにしても、最後に、「なるほど」と落ちることが面白いんです。

これは、さっきの社会に繋がる日本語教育をしているときに、いちばん最初にポケモン GO の野村達雄さんの話から社会的成功を収めるにはどうしたらよいのかというのを考えていく時に、どういう力が必要かを皆さんで考えましたが、そういうことを考えていく時に、今やってみたい一連の話って大事だということです。

なぜかというのを考えていきたいです。

(2)「学力」とは何だろうか？

最初に戻ります。まずそういうことを考えていく時に、これは決して日本語教育の話だけではない部分があるんですが、今学校でそもそも、今何が求められているのかって言うのを考えるということが大事だと思います。

それはなぜかという、さっきのポケモン GO を作った野村さんは、黒竜江省で生まれて、中国からの帰国者の子どもで、日本語を学んでいて、社会的成功を収めた。そういうこと自体をやっていくってことは、外国から来た子どもだけじゃなくって、今の子どもたち全員がそういうことをやっていけないといけないうねという話でもあるわけです。そうすると、これは別に特別にその子たちだけのためにやるのではなくて、学校全体でそういうことを考える力というのを付けていかなきゃいけないのですが、それは具体的に何をどうすることかということ共通理解を私たちが図っていかなければならないんですね。

学力って何なんだろうというのをまず考えてみたいと思います。

① 算数の問題から¹

今①、②、③とプリントに問題があります。①は 35×0.8 は？ 答えは 28 ですね。という問題。②は、計算が 35×0.8 で表すことができるような文章題を作りましょうという問題。それから③は、「あ

なたは部屋のリフォームを考えています。あなたの部屋は縦 4.2m、横 3.4m、高さ 2.5m の部屋です。今回あなたは床をタイルで敷き詰めようと考えています。お店へ行ったところ気に入ったタイルが見つかりました。そのタイルは一辺が 40cm の正方形で、1枚 550 円です。お金はいくら必要でしょうか。途中の計算も書いてください」という問題です。この3つの問題は、何が根本的に違いますか。ちょっとそれをグループで話してみてください。

(グループで話す)

では、聞いてみましょう。何が違うと思いますか。

①は答えだけで、②は 35×0.8 が、この社会で何に役に立つのかを問うている問題だと思いました。③は、お金が出てくるので、計算したらお金がいくら必要なのか、社会生活に役に立つよということを表現していると思います。

これを外国から来た子どもにそのままやらせましょうという問題ではありませんよ。もちろんこれを外国の子どもたちがやるためには、いろいろな仕掛けが、教科と日本語の統合学習の時間にリライトとかいろいろな話があったと思いますが、それはそれとして、これらの問題の質として何が違いますかという話を聞いてみたいと思います。これは全部算数の問題なんです、元々の発想が全然違うというのが分かると思います。皆さんに聞きたいのですが、難しいなあと思うのはどれでしょうか？

難しそうだけど面白そうな問題というのが実はあって、これは教育とか授業を考えるうえですごく重要なのかと思います。そういう意味では、私たちは分かる授業と面白い授業のどちらも大事だと思うんですが、意外にわかって面白い授業よりも、もしかするとこれはよくわかんないけど面白いという授業が実はあって、この部分というのは大事かもしれないということです。今、学校で学力とは何かと考えていくときに、今の学校の中で大事だと言われているものは、必ずしも分かるということやできるということだけでは決してありません。

② 学校で育てる能力の「深さ」の分類

次ページの学力の図は、最近学校関係の研修で出てくるものです。

一番下の図の青い部分は、「知っている」というゾーンの話。例えば、知識の獲得と定着という話ですね。さっきの計算問題で言うと①の問題にあたるものです。計算問題でそういう式があるのを知っていて、その知識としてできるという状態の話。

それから2つ目に「分かる」と言われている緑のゾ

¹ この①と②については、石井英真『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキ

ュラムの光と影（日本標準ブックレット）』日本標準、2015年、に依拠しています。

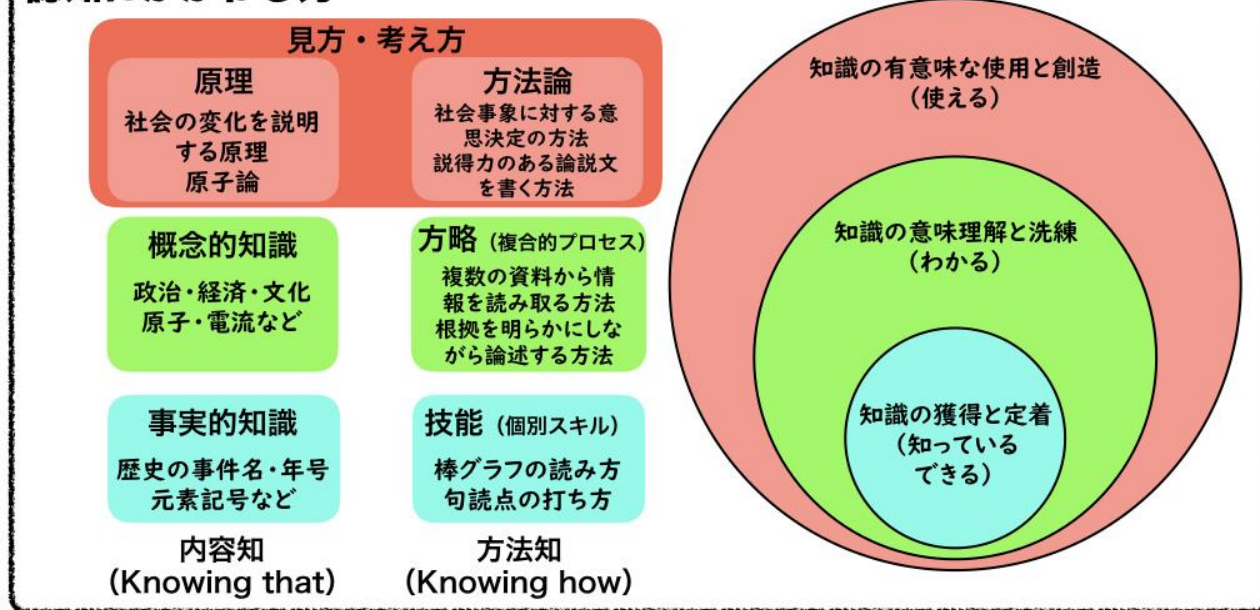
5 こうした力を「日本語学習者」も獲得できるするためには？

行為・関係・社会にかかわる力

課題の意識化・発見・異質な他者との対話、協働、社会関係（共同体）を民主的に組織化し再構成する力、個の確立、自律と自治

メタ認知 自律的課題設定、持続的な探究、自己評価、学び続ける力

認知にかかわる力



石井英真 (2015) 『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』日本標準ブックレット

ーンの話で、ここでは知識の意味理解と洗練と書かれていますが、要するに考えながらその計算式の意味が分かっていて、それを使いながら、いろんなものに当てはめてみるのができたり、これが成立する問題はどのようなものかなというものです。まさにさっきの算数の問題の②のようなものですね。それを使いながら、別のことを深めたり、意味を捉えて、意味が当てはまるものは何なのかというのを考えるようなことができる話です。

厳密には分けきれものではないですが、③のようなものは、「使える」というゾーンです。世の中で応用ができるという、こういう式はこういうところを使うんだ——というようにところが考えられるようなものは「使える」という赤のゾーンになります。

そういう意味では学校の知識とか学力といわれているものは、青だけを学んでいけばいいということではないですね。今朝のパート 1 での野村さんの成長の話にも合ったように、例えば新聞配達のアパートの時の話とか、そこで計算を使ったりとか、コンピューターを自分のアルバイト代で何としても買いに行くであるとか、そういった形で自分の生活とどうやってつなげながら使える知識にしていくことの

大事さを思い返してみれば、決して「知る」のところだけをしていけばいいというわけではないでしょう。

それから、これは、野村さんの話からも思えるんですけども、決して、これ「知る」ができないとこち「使える」に行けないというわけでもありません。シチュエーションがあって、そういうシチュエーションの中で、私たちがそれをやるためにどういう式がいるのかを考えるとということもできるわけです。私たちは基礎基本から応用というふうに、これ「知る」ができてから「わかる」、そして「使える」というふうに考えがちなのですが、そうではなく、野村さんのエピソードにもあったように、「使える」という状況をまず想定して、その結果として「知る」もありますよね、という発想が大事です。

これは算数だけではないですね。例えば歴史の学習を考えると、特に歴史が苦手な生徒ほど、事件名とか年号をひたすら覚える。あるいは、化学が苦手な人ほど、とにかく元素記号表を部屋に貼って、覚えるって状態でやっけてしまいます。まさにこれは「知る」のゾーンを中心に考えているわけです。でも、それだけでは、受験が終わって大学に入って 2 カ月くらいしたらもう忘れていきますよね。歴史の勉強は頑張って

やっているけれども、歴史が使えるようにならないし、たぶん忘れていく、本当に歴史が使える状態にするためには、もうちょっと上の概念で、政治って何、経済って何とか、文化って何なのとか、社会って何と聞かれたときに、「えー？」と言いながら、自分たちであれこれ社会の定義を国語の辞典のように作ってみる中でうまれます。今日の冒頭にも行いましたね。そこで繰り出した皆さんの言葉は、たぶんずっと社会の定義として、何かシチュエーションが起きたときに、社会ってこうだよって言えますよね。というふうに、そういう概念として理解する世界と、さらにそれを使って何か世の中で使えるように使っていく。

「使える」ということの中には、例えば社会の変化を説明するとか、元素記号を覚えるだけじゃなくて、電子電流とは何かとかのレベルでわかるようになるものもあります。それからもうちょっと大きいわかりかたでは、「科学的な理解」というような状態になります。方法についても同様です。技能というところかというと、私たちが一番簡単な技能として算数というと棒グラフの読み方とか、あるいは国語でいうと句読点の打ち方とかは、一番下の「知る」ゾーンに近いものです。もうちょっと大きいレベルで言うと複数の資料から情報を読み取るとか、根拠を明らかにしながら論述する方法とか、同じスキルでもこのスキルよりも抽象度が高くレベルの上のものだったりしますね。あるいはそれを方法論にするときには、もうちょっと上の使える方法にするには、説得力のある論説を書く方法みたいな形で、もうちょっと社会で使えるとか、社会的事象に対する意思決定の方法を得るとか、こういうふうにもうちょっと大きい概念で理解していかなければいけません。

私たちは授業で支援をしたり何かしようとしているときに、子どもたちはわかっていないとか、わからないということを前提にすることによって、いつもここの「知る」の部分で頑張ってやりがちなんだけれども、今の学力とかを考えていくと、「できる」の状態につなげていくことが大事です。今朝の野村さんの話しでいうと、野村さんを生み出すためには、「知る」に固執すると野村さんは生まれていかない。多分野村さんも逃げるというか、「やだー！」と言って帰っていくという状態が生まれがちになってしまう。

そうすると私たちがこれから授業を考えていくときに、特に社会につながるとか、世の中に参加できる状態を作っていくためには、授業の発想とか扱う内容とかテーマとかトピックとかを、ここ「知る」にこだわるのではなくて、もうちょっと大きいレベルで考えることができないかということが、今重要になってきています。

(3) 野村さんのような力を日本語学習者も獲得するためには？ 実践の分析

でもそんなことを言われても、じゃあ何をすれば

いいのかもぜんぜんわからないし、そもそも日本語指導で何をするんですかとなると、もっとわからない状態になってしまいます。こういうことをわかったうえで、日本語指導の場で、そういうことができないのか、何かやることはないのかなと私たちが具体的に考えていきましょう。

最初に具体でゲームはしましたが、もうちょっと大きく見ていきたいです。資料3を配ります。パート3のテーマは今教育に求められている学力的なものを、日本学習者もできるようにするためにはどうしたらいいのか。それは教科と日本語の統合学習でやっているかもしれませんが、ただ単に教科がわかるだけではなくなかなか難しい部分もあります。教科をどうするかという部分をちょっと超えて、見ていきたいと思います。

今から読む話は、2006年の頃の実践の話なので、ちょっと昔のものになります。何の実践かと言うと、中国の毒餃子の事件を皆さん覚えてらっしゃいますか。手作り餃子の事件で、毒を誰が入れたのかって話が出てきたり、なぜ入れたのかって話が出てきたり、そういう報道がいっぱいあったんだけど、あるところから報道がなくなっていった、たぶんそれは北京オリンピックが近いからじゃないかとか、日中の関係を考えて報道をしなくなったとなっていくって、忘れたところに犯人が逮捕されたということがあったと思います。

そういった事件のさなかにあった実践で、東京のB小学校というところでされました。B小学校は校区の中に、中国人の方が多くすむ街があり、いろんな形でそうした社会の中で生きている子どもたちです。

中国バッシングとかがあったときに、いろんな形でそういう言葉を聞いたりとか、そういうことによって困っている大人たちを見たりとかという現実が当時あった中で、小学校の先生によってなされた実践です。朝日新聞の記事なので、実際に全部が書いてあるわけではないのですが、まずこれに目を通してどんな実践かまず読んでいただけますか。

① 実践を分析してみようー餃子事件の犯人は誰か？

さきほど、社会の中で自分が学んだことを使えるようにしていくようなことが大事だと言いましたが、じゃあそれを日本語教育の中で実現するにはどうやったらできるのだろうか？ ということを考えていきます。

まず1つ目に考えること。この実践で、子どもたちはどんな力を得たのでしょうか。午前中の野村さんの話の時に、「社会で活躍できるようになるには人生の中でこういう力を付けていかなければいけないよね」ということを、午前中に付箋にいっぱい書き出していますよね。それを参照しながらでも構いません。考えてみてください。

2つ目に考えること。これは日本語教育の日本語指導の授業であることは間違いありません。ただ、新聞記事は日本語教育に焦点を当てていてはありませぬ。あくまで新聞記事は、日中の分断が社会問題として起きているときに、共生について読者に考えさせるために、学校でされている授業について取り上げています。ですので、全然日本語指導的なノウハウとか、言葉がわからない子どもたちが、どうやったらそれができるようになるのかとか、そういったことについては一切書いてないんです。ただ、明記はされてないですけど、推測はできます。皆さんの経験もあると思いますので、この断片的な情報の中で、多分こういうことやっているよねということを、ちょっと探りながら考えてみてください。

というわけで①どんな力を得たと考えられるでしょうか、②そのために、日本語の壁をどのような支援で乗り越えたと考えられるでしょうかということを考えてみましょう。

(グループで話し合う)

- ① この実践はどのような「ゴール」を見据えており、子どもたちはどのような力を得たと考えられるでしょうか？
- ② そのために「日本語の壁」をどのような支援で乗り越えたと考えられるでしょうか（ここは明記されていないので推測）？

話をまとめるのが難しい時は、キーワードを一緒に作るといいですよ。特に①のほうはキーワードの抽出がやりやすいと思います。②の部分は詳しく分析していただきたいので、まず①と一緒に考えましょう。①を考える時に、〇〇力という形でキーワードを作ってみてください。いくつか作って、妥当なものを生み出してください。そして、それを生み出すためにどんなことをしているのかという話をするといいたいかなと思います。

② 分析の結果の共有

では、共有してみましょう。

①キーワード

(受講者が考えた「子どもたちが得た力」)

情報を読み取る力、課題を解決する力、実践力、客観的に見る力、4技能の総合力、私たちの気持ちが一番苦しいと自分の気持ちを訴える力、意思決定力、現状を分析する力、自分たちはこういうことができるんだという可能性の力、手紙を書くという行動力、検証力(確かめてみる力)、説得力、提案する力

以上のような力が育まれているのではないかと、私たちは推理しましたね。

ここに書いてあるように、情報を読み取る力、課題を解決する力、客観的に見る力——これはすごく重要です。客観的に見る力は、この実践のいろんなところで出てきますね。最初にこの子どもたちが言うには、「犯人は〇〇人である確率が〇%」というようなことを述べているのですが、だんだん新聞などの報道記事を読んでいく中で、本当にそうなんだろうとか、自分たちが最初に考えたのはあっているんだろうとか、という疑念が生まれてきていますね。新聞の報道が止まってしまったのはなぜなのかというのを考えるのも、客観的に見る力だともいえます。そういう意味では、最近よく言われている批判的な思考力などにもつながるものです。ちょっと一歩引いて客観的に見ることは大事だよという感じですね。

また、さっきのA小学校の話からも出てきたような、自信につながる力。自分たちはこういうことができるんだという可能性とか、その行動力とか、確かめてみる力、これも可能性であり、行動力ですよ。「おれたちメタミドホスが怪しいと思ったら、ちゃんと確かめることができるんだぜ」と思うことって、日本語ができることを越えて、すごいことですよ。

さらにそれを胡錦濤主席と当時の福田首相に向けて、手紙を書く力あるいは首相という人たちを自分たちの言葉の力で説得できるのかという力とか、提案をする力、みたいな書くだけじゃなくて、そこに相手がいるからこそ生まれる熱みたいなのが生み出されるということが実はあるということですね。

③ 「日本語の壁」を越えて学習への参加するために

みなさんはプロなので、それを日本語指導に実現するにはどうしたらいいのかということも、今推理する中で出てきたと思います。

例えばリライトをするというのもそうかもしれません。新聞の記事の読みやすさから考えてリライトすることは重要です。また、先生が、「ここは何て書いてある？」というようなことをあえて問いかけながら読むことも大事なかもしれません。実際に実験するのもわかりやすさにつながっていくことがあるかもしれません。

そういうことを見ていくと、最初の課題であったように、この実践を見ていくと、日本語教育の場でも、意外にもいろいろな形で学びを作ることはできるよねということです。

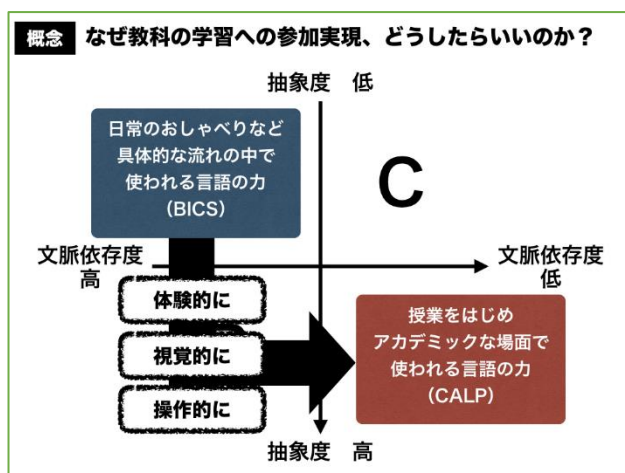
例えば、さきほどの学力の図で見ると、事件の経緯とか普段だったら知りえないメタミドホスという語彙を知るのは、「知る」ところにあるのかもしれないし、新聞の読み方・手紙の書き方みたいなものも同様の水準の技能にあたるのかもしれません。でも、もうちょっと上のところで、事件の背景にどんなことがあったのかというのを考える力や、化学の概念で浸透という概念を得て、それをビニールで隔てられて

るのがこういうふうに移っていくのを浸透っていうんだ——というような話は、もうちょっと抽象度の高いものかもしれませんね。それから方略プロセスでいうと、複数の新聞から情報を読み取るという話、根拠を明らかにしながら説得をすること、論述をするというのも入っています。さらに、もうちょっと上の「使える」というところでは、新聞報道が止まった意味って何なのかと考えることや、共生とは何かというのを直接考えているわけではないけれども、狭間に立つ私たち、中華街の人たちの気持ちを、経緯や背景と絡めながら述べてみるということ、大事なものは誰が犯人かなのではなくて、なぜ犯人がそんなことをそんなことをしなければいけなかったのかだ——という意見を表明できるような発想を持てるようになること、さらにそういうことを実際に首相に向けて訴えるということ——これは本当にできたのかわからないけれども——そういうリアルな場があって、それをやることによって本気になれる場というのが設定されていることが、「書く」という行為の中に熱量を込めることにつながっていくわけです。そんな発想を上手く組み立てていくことで、いろんな力が、日本語指導の中でも養えるのかもしれません。

(4) 学習に必要な言語の力とは

① カミンズの学習に必要な言語の分析

これはもしかすると2回目くらいに伊東先生の授業の時に出来たかもしれません。教科と日本語の学習の中で見たことがありますか。



教科学習とか難しい学習など、ちょっとアカデミックな学習にどうやったら参加できるようになっていくかということで有名なカミンズによる図です。

教科の学習に代表されるように、抽象度が高い低い、文脈に依存している言葉、依存していない言葉というものがあつた時、日常のお喋りとか具体的な流れの中で使われる言葉というのは、抽象度が低い。例えば私たちが海外に行ったときに英語で買い物ができるようなものは、具体的なものが目の前にあつて、

私たちがそれを使って買い物をするという文脈があるために、拙い言葉でも何とか頑張ってジェスチャーを取り込んでできますね。でも、抽象度が低く文脈依存度が高いような、アメリカに行って買い物はできるけれど、ハーバード大学で大学生とディスカッションして来てと言われたちょっと無理と思うのと同じように、やっぱりアカデミックな場面でちょっと知的なものを抽象的に話し合う場面ではとても難しいところがあります。

じゃあ「抽象度が高く文脈依存度が低い」をやるのは無理なのかっていうと、そうじゃない。大事なのは、絶対に無理ということではなくて、私たちは学校の授業の中で、それをどういうふうに崩していくかが大事だということで、こうやって体験や視覚や操作を通じて、そこにつなげていくことが大事なんですよ、というのがカミンズのメッセージです。

② 「いい授業」は常に文脈が存在し、次第に抽象度が上がる

実は学校教育で、日本語指導に限らず、あまねく授業で「いい授業」と呼ばれるのは、決して問題を解くような形で、常に「抽象度が高く、文脈依存度が低い」に始まり、そこで終わるようなものではありません。いわゆる「いい授業」というのはこういう抽象的なものを子どもたちの文脈に戻してあげたり、わかるような形に書き換えてあげているうちに、次第にだんだん「抽象度が上がっていく」ような話をしていくというのが大事なんだと言われます。この講義もそうになっているはずです。

実は学校で外国人の子どもがいる、いないに関わらず、いろんな授業でそういう実践はされています。

例えばプリントにある、「桃太郎裁判」なんかはそういう授業です。これは、NHKで昔話裁判というのがときどきありますが、その走りのような授業です。簡単に言うとこれは「桃太郎はやりすぎじゃないのか」という話です。「桃太郎は懲役何年か」という授業を小中連携でされていた授業です。普通は中学生が小学生に教えるんですが、これは逆。小学生が桃太郎の悪を暴き出す検事になって、中学生が桃太郎を守る弁護士の役になるんです。その中でいろいろやってみると、考えてみると桃太郎はやり過ぎじゃないかと、あらためて考えてみればいろいろ出てくるわけですね。例えば、桃太郎は最後鬼に勝つてとなっているが、そもそもあれは暴行じゃないのかとか、宝を村に持ち帰るけど、よく考えればあれは村の宝じゃなくて都の宝じゃないのかとか、桃太郎は横領しているんじゃないのかとか。

そういうふうな話をしていって、子どもたちが今まで善人と見ていた桃太郎を悪に見立てて、悪を突いていくという面白さがあります。絶対に検事の方が楽しくて、弁護士の方は楽しくないんですね。中学生が防戦をして小学生が攻めていく授業なんです。

中学生は中学生で頑張っ、そうは言っても例えば桃太郎が鬼のところに来た時に、「桃太郎め、取れるようなら取ってみろ」と威嚇をしていると言うんですが。でもそうは言っても、きじが門を飛び越えて、さるが門を駆け抜けて裏側から門を開けて裏側から桃太郎が攻めるのはやりすぎじゃないのかとか——そういう話をやっていく中で、子どもたちが今の刑法でいうと何なのか、懲役何年かとか、裁判員制度を考えていきます。こういうのでもさっきの使える知識、知る知識がいろんな中で埋め込まれています。

こういう発想って、意外に学校の授業でいきなり裁判官とはとか、刑法とはというところから始まると難しい。けれども、桃太郎という具体的な話を、そこから桃太郎はやりすぎじゃないのか、いやそんなことはないんじゃないかという話を体験的に、視覚的にやっていく中で、次第次第にそういうことを使って学んでいくという意味では、日本語指導だけじゃなくて、いろいろなところで使われているんですね。

③ 餃子の授業における「文脈のつくりかた」「抽象度の上げかた」

そして、今回の餃子の話でいうと、ここからどういうふうに学びを深めたかという、いろいろな方法があるけれども、最終的には皆さんの言っていた「共生するとは」とか、あるいは「事件の起きた意味とは何なのか」とか、抽象的なことについて言葉を使っていこうとすることに最終的には向かっていきます。でも、いきなりそこから入るのではない。最初は簡単に犯人は誰だってところから入っていきます。犯人は日本人か中国人かという議論から入っていきながら、次第に犯人が誰かを考えるために新聞を読むとか、犯人を考えるために実験をするとか、あるいは考えたことを伝えるために手紙を書くという行為をしていくことで、だんだん「抽象度が高く文脈依存度が低い」ゾーンに向かっていく、そういう学びを生み出している。

そういう意味では、先ほどあったように、リライトもそうかもしれませんし、問うて新聞を読ませるといこともそうかもしれませんし、いろんな技の中で日本語的な授業も日本語としてわかりやすくしていくという話はもちろん含み込まれています。でも、それだけで終わっていません。

こういう授業は学力を育てていく、さっきの野村さんみたいな発想、創造性や個性を伸ばすとか、じっくり考えてみるとか、目の前にあるものを使って工夫をするということに、確かにつながっている部分があるかもしれません。

(5) こうした実践を、いつ行うか？ カリキュラムマネジメントとして

ただし、こういう話をするとよくあるのは、そうは

いってもこれは確かにいい授業だと思うんだけど、これを毎日私たちがするのはちょっと無理ということとか、なかなかそこまでするのは難しいですよ、という話も一方であるわけです。

もちろんそうなんです。それを考えていくときに、いちばん最初のクイズに戻るわけです。クイズをやっていくときに、いちばん最初に考えてみたいのは、いつもすごい授業を何十時間もかけてやるのが大事なのかとか、あるいは教科と日本語を合わせた学習の形で3時間くらいの単元を作ることができるのかというと、皆さんが普段持っている場の中でいつもできるかどうかはわからない。できるに越したことはないけれども、1回くらいはやっていたと思うけれども、とても毎日ではできない。でも、それはすごく大事なことで、そういう発想やエッセンスを持ったうえで、もう一回日常でもできることを何か考えてみましょうということが大事だと思います。

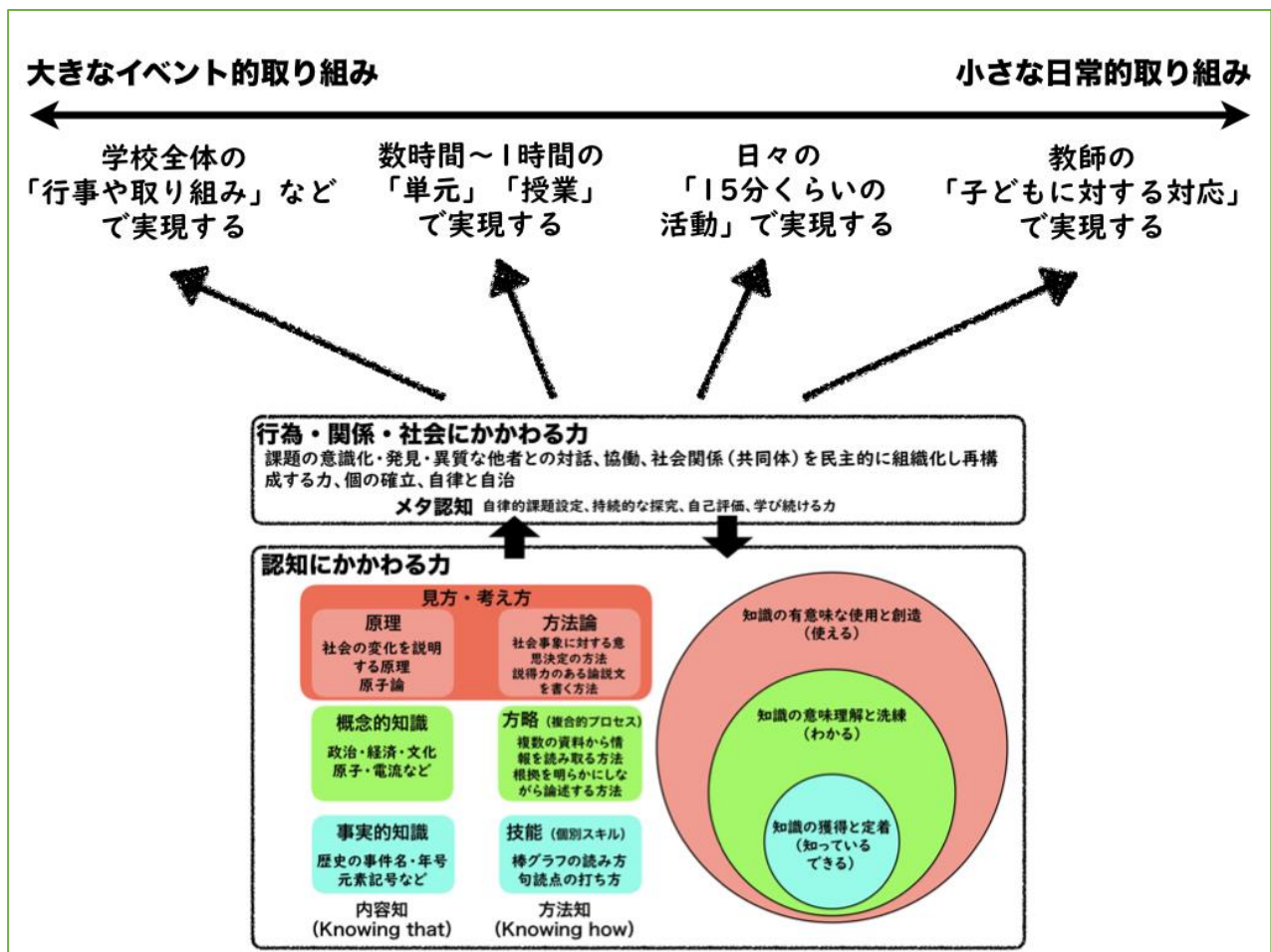
そのときに出ていたのが、パート3の最初にやったような活動はヒントになるはずですよ。

日常的にできる象形文字を見ながら漢字の語源を考えてみるクイズしたり、20年後に車が飛ぶようになったら話をつかまえて、子どもが「20年後に車は空を飛ぶんでしょう」と言い出した時に、「そうだよ。飛ぶかもしれないけど、そのときにどんなルールが必要？」みたいなことを一緒に考える時間をちょっと投げてみるというのもありかもしれません。日常的に考えるときに、未来のルールを考えてみることは、明日に使えて、役に立って、社会につながっていく何かを考える話し合いになります。

それから、さっきみたいに考えながら遊ぶというのもそうかもしれません。さっきの水平思考ゲームみたいなのは、そうですね。

こんなふうに考えていくと、実はそんなにすごいことをやるということじゃなくて、そういう発想を持ったうえで、日常の中で私たちがちょっとやってみる工夫というのを考えていけることは大事だと思います。最近『中学生の日本語』という教科書が出て、一橋大学の庵功雄先生が作られたんですが、開いたらいわゆる『みんなの日本語』のような文法と文型のできた教科書です。その中に中学生が日常的に使うような言葉を入れた例文を作る、例えばポップカルチャーというところがあって、「ながらスマホ」という語彙が登場して、「ながらスマホはいいと思いますか」という問いがあって、「いいと思います」の練習がある。そうやって中学生の子どもたちの日常で使われている世界の言葉を上手く入れながら、社会につながりのある話、中学生の世界につながりのある話を例文で勉強していくだけでも全然違うかもしれません。そういう意味では、よく使用されている『ひろこさんのたのしいにほんご』などに出てくる例文も、ちょっと手を加えて彼らの世界にマッチさせた例文で話していくのもありなのかもしれない

です。



大事なのは何かというと、私たちは往々にして「教科と日本語の統合学習」をやろうといった時も、3時間分の単元を考えてくださいとか、50分くらいのものを考えてみましょうという研修がありがちです。そういうことも大事なんですけども、それだけじゃない。今みたいな日々の漢字のゲームくらいなら、普段やってる学習に加えて、子どもが疲れてきたときに、ちょっとこれやってみようかという形で、日々の15分くらいの活動から実現させていくというのもいいのかもしれない。

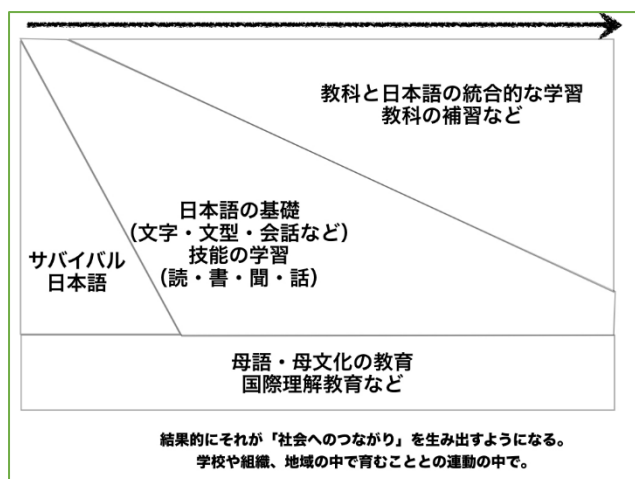
あるいは、さっきの「先生、車2030年には空飛ぶんでしょ？」という発言を拾って、そこで未来のルールについて遊ぶと面白いかなという発想で、「じゃあ、どんなルールがいる？」というふうに、子どもの発言に対応する場面でちょっと入れてもいいかもしれません。

さらに、逆にパート2でやったように、もっと大きいことで、授業ではなくて、学校の行事とか取り組みの中でみんなでやるのもいいかもしれません。それはすごく面白い深い学びができるかもしれないけれど、1年に1回しかできないのであれば学びの幅としては狭いかもしれませんね。でも、逆にイベントだからこそ、「背伸びする」学びもできるわけです。実

験授業とか公開授業とかで、先生が作り込んで何かをするような授業って日常にできるわけではないといけれども、一方で「イベント」として子どもも先生も背伸びしながら、見られるからこそ頑張れることというのもあるわけです。そういう意味では、1年に1度、2年に1度くらいイベント的に大きいものをやってみるというのも大事ですね。

ただ、それだけでは力になっていけないので、逆に小さな日常的な取り組みの中で実現するのも大事なことです。そうすると、普段やっている大きなカリキュラムを変えなくても、やっているような流れの中で、ちょっと遊んでみようかという時にそういうものを入れてみる、そういう話をしてみるのも、一つ大事なのかなと思っています。

こういうのは教育学の最近の言い方では、「カリキュラムマネジメント」という言い方をします。カリキュラムをただ作っていただけじゃなくて、自分たちの日常できることの中で、どんな調整ができるかというので、少しずつやっていくことでも、子どもたちから見たときの学びの総体がぜんぜん違うものになっているのかもしれない。



この図は日本語指導のプログラムでよく出てくるものです。横軸に時間の流れがあって、初期のころはサバイバル日本語のようなものをやりながら、だんだん文型の指導に移行していきながら、だんだん教科と日常の統合学習みたいなものをしていくといひですよ、というのは皆さんが以前の研修で、日本語指導そのものの学びの中で出てきたと思います。

ただ、私たちがさらにそれを発展的に考えるのであれば、これをやるだけでは、教科を知るとか、計算をいかに頑張らせるかっていう話だったり、そういう話になってしまいがちです。なので、この大きな流れを見立てていきながら、教科の学びじゃなくてもかまわないので、ちょっと考えるエッセンスを日常の中に取り込んでみるとか、みんなで対話をしながら一緒に考える面白いゲームを一緒にしながら、知的なものに触れ合っていくという作業をすることによって、思考を生んだり、言葉を生むということが促されていくと、結果的にそれが社会へのつながりを生み出したり、野村さんみたいな人を意図的に教育の中で育てるときには、そういう仕掛けがあったほうが実現の可能性は高いのかもしれません。

(6)「高次の学力」はなぜ必要なのか？

① 今求められる学力として

最後に、高次の学力が何故必要なのかという、今みたいな考える授業とか思考を生む授業というのは、どちらかというと、実践したり提案で出てくるのは、国立大学の附属校のような学校が多いです。いわゆるエリートが集まる学校で、よりよい高次の学力をどう育てるのかという議論はすごくある。けれども、一方で困難校——A小学校のような困難を抱えている学校の中で、学びを作っていく時は、どちらかというとケアをどうするかという話に寄りがちです。そういう意味では、高次の学力を育てる話とケアをしていく話は、いま日本学校の中で分断しています。ハイレベルの学校では高次の学力の話がどんどん起きて、困難校では学力をケアする話が非常に多いのです。

しかし、外国につながる子たちのことを考えていくと、そうした子どもたちだからこそケアに留まらずに高次の学力をどう育てていくかということが大事です。そうすると、野村さんのように中国から来ても、日本語指導から入っても、日本語で不十分な面がいっぱいあったとしても、それが社会的成功につながっていったり、ポジティブな思考を生んでいって、自分たちで何か動いていけるようなものにつながっていく側面があるのではないのでしょうか。

実は外国から来た子どもたちだけでなく、子どもたち全体が必要としている時代になっていますよね。私たちが学校生活を送っていたころは、確定された事実の学びというのが重要でした。過去を知るとか経緯を知るといふのも、過去というものは確定されたものであって、進むべき未来の話もある程度確定していた。過去の話を考えるのは専門家の仕事、経緯を考えるのは専門家の仕事であって、未来を考えるのも専門家の仕事であって、一般人が考える領域というのは、この「確定された事実」をきちんと知っていくことが大事なんだという世界観で、学習は語られてきました。1990年代くらいまではそうだったんですが、特に2010年代、東日本大震災があったころから、そういうふうな発想で世の中はできていないことが世間に知れるようになってきました。原発が大事だと言っていたがそうじゃない側面で見ると、全然違うものが描けたりする過去が見える。過去は不確定だし、あるべき未来の姿も不確定。いろいろ考えられるんだということが生まれてきました。つまり専門家の仕事として考えることも大事だけど、一般人も同じようにこのへんのことを考えてもいい。むしろそうした資質こそ一般人の大事な視点だよねという時代になってきていますね。

そういうのが、新しい発想が生まれてくるようになったり、あるいはもっと面白い仕事を生み出すことができたり、社会参加をする力が大事だよと言われることばにつながっています。

そういう意味では、外国につながりを持つとうが持つまいが、日本語指導を受けようが受けまいが、日本語指導を受けていない外国人児童生徒であろうが、そういった学びに参加できるような状態を私たちが、いろいろな幅広いスパンの中で実現させていくことが大事なのだと思います。イベントも、日常も、いろいろな場の中で考えていくのが実は大事です。

② 「高次の学力」は、外国にルーツを持つ子どもをどう救うか？

最後に。こういう話が外国にルーツを持つ子どもにとってなぜ重要かというと、人間の様々な権利は法で保障されているんだけど、日本ではいろんなその権利が国民に限られやすいという側面があるからです。

外国人の場合は、法的地位を持たないことも多い

わけです。例えば日本国籍がないとか。それが何を生み出すかというと、法的地位がないから就学義務がない、得られない。だから学校に行かなくてもいいですよという話になりがちです。不就学の問題は、結局外国から来た子どもたちは学習する権利を持っていないと見なされるからです。

同様のことは子どもの外国人に限りません。例えば、法的地位がないから妊娠や出産をしても検診や予防接種が受けられない状態があったり、そもそも情報が来ないという状態があったりする世界の中で、行政のさまざまなサービスから漏れやすいリスクというのが生まれてくる。そうすると、結果的にそれが社会とのつながりを失くしてしまったり、排除が生まれてしまったりする側面があります。

社会参加のための日本語教育がなぜ大事なのかというと、最終的に考えなければならないのは、法的地位がなくても権利はあるんですよということです。私たち日本社会は法的に人権を保障されているということと、日本の国籍を持っているということがイコールで結ばれやすい世界に生きています。しかし、今の世の中のことを考えれば、法的地位——つまり国籍があろうがなかろうが、そこに住んでいる限り、そういうことを学ぶ権利はあるし、何かをする権利があるんだよということをマジョリティも知らなければいけないし、マイノリティも知らなければいけない。

そういうことを保障していくためにも、さっきみたいな考える力を作ることであるとか、皆さんがさっき言っていたような、そこから情報を整理する力、自分のことを表現する力みたいなことは、彼らが社会の中で生きていく中で、すごく重要なわけです。

社会参加のための日本語教育ってすごく大きな話をしているように見えるのですが、それを実現するには、そんなに難しいことじゃなくて、普通の授業や実践の中で、一步一步彼らに考えてもらう時間を作ったり、それを日本語で表現したり、日本語で話してみる中で一緒に考えてみる時間をたくさん作っていくということが、それを生み出すのだと思います。

そのためにできることなら、何をやってもいいんです。こういうことをしないと社会参加のための日本語教育じゃないですよなんてことは絶対ない。普段の中でちょっとできることをやってみるということが大事かもしれないし、パート2でやった組織の話でいうと、どうやったら承認を受けられる世界になるのか。

そのためには、「普段できていないからあまり見せたくないなあ」、「僕の授業へたくそだからあまり文化庁の後ろの人に見せたくないなあ」と思う側面はいっぱいあるのは皆あるのですが、でも仕方が無いから見せる。見せることによって、意外に認められたり、なるほどと思ってもらえたり、頑張っているんだねと思ってもらえたりすることで、ひょっとすると

承認が生まれるかもしれないし、それが結果的に見せられることによって励まされたりする、自信が持てるようになっていくという側面があるのは、私たちが外国人であろうがなかろうが、実は一緒ですね。そういう側面を生んでいけるといいのかなと思います。

6 振り返りと課題

ということで、今日の流れとして、最初は外国人児童生徒の社会的成功のためにどういうことが必要ということを、野村さんの人生から考えました。パート2では、社会につながるために学校は何ができるのかというところから、学校の変革の取組みというところで、どういうふうな仕掛けがそこに埋め込まれていたかを皆で考えました。最後のところは、そういうつながりを持つために実際の授業とか普段の日常ではどんなことができるのかっていうのを、授業という場面の中で何ができるのかっていうのを考えてみました。

そういったものから、私たちが自分たちで社会参加をしていくためにつながっていく日本語教育というのはどんなことができるのかを考えました。

課題を出しますが、課題は家でやらなくても、皆がいる時に話してもいいよねということを大学でよく言っているので、せっかくなので残りの時間で、振り返りもかねて、皆さんだったらどういうことができそうですかということをちょっと考えていきましょう。

最終課題

「社会参加のための日本語教育」を考えていくうえで、どのようなことが大事だと思いましたか？重要だと思うキーワードを2～3挙げてください。

また、あなたの現場で具体的にどのようなことを行っていきたいと思いますか？

上に挙げたキーワードを文中に使いながら、自分の思ったことを説明してください。

これが、最終課題です。

こういったことを考える時、どうしていいかわからない人もいるかもしれませんが。今ここでフィードバックすることも大事だと思いますので、課題をレポートで書くために、相手や目的が見えるといっぱい書けるという話もありましたので、レポートを書くために、自分たちはどんな学びをしたのかを、今考えて出しておきましょう。レポートが書きやすくなります。

(グループでの話し合い)

いろいろな引出しの開け方を持ち帰っていただけたらと思います。もう一つ、参考文献というものではないのですが、昨日読んでいて、これはたぶんつながっているだろうなという本を紹介します。

一つは、『ど田舎生まれ、ポケモンGOをつくる』という野村達雄さんの自伝です。それから、パート3やパート2 でやったような話は、日本語教育でも使えますけれども、教育学そのものの話で、今すごく大事だよと言われているものともつながっています。それらを学ぶときに、最近よく出ている『マンガで知る教師の学び』と『マンガで知る未来への学び』という本があって、これは熊本大学の教職大学院の先生が書かれているマンガです²。これはどちらかと言うと、今日の話のように、大きな話も含めながらそれを普段の学校でどんなふうにやればいいのというようなことについて答える、結構、リアルもありかつ大きな視点もそこで学べるので、いいなと思います。もし、今日みたいな話がよかったら読んでみてもいいのかもしれない。

今日はこれで終わりたいと思います。

² 前田康裕『まんがで知る教師の学び—これからの学校教育を担うために』シリーズ（第1巻～第3巻〈2016年-2018年〉）、同じく『まんがで知る未来の

学び』シリーズ（既刊第1巻～第2巻〈2018年～2019年〉）、さくら社。